

明治十七年
内務部理事公文録

内務部

244-4
函架冊類

国立公文書館

分類	
排架番号	2 A 34-2 ① 1604

七年參事院內務部理事公文錄一月分

目次

司法部省賭博犯處分規則創定ノ件

上無名氏第八期報告ノ件

外務省中東亞及信條約ニ加シテ井ノ件

内務省高卒業証書及免許狀沒收ノ件

内務省枋木縣廳位置改正ノ件

内務省賭博犯處分方ノ件

全上勲章年金褫奪ノ件

全上地所轉質公證ノ件

全上宮崎縣下分郡ノ件

大藏省同勸業補助費ノ件

十五年三月二十日受

十六年一月四日布告

十六年正月

十七年正月十日受

十七年正月十日受

十七年正月十日受

十七年正月十日受

十七年正月十日受

十七年正月十日受

十七年正月十日受

十七年正月十日受

元老院議定上奏賭博犯處分規則制定之事

右謹_レ裁可_ヲ仰_ク

明治十六年十二月廿八日

可

太政大臣三條實美印

左大臣熾仁親王印

參議大木喬任印

參議山縣有朋印

參議伊藤博文印

參議西鄉從道印

參議山田頭義印

參議松方正義印

參議大山巖印

参議 川村純義印
 参議 福岡孝弟印
 参議 佐木高行印

司甲六九二號

明治十六年十二月廿六日

大臣 三條 有栖川

内閣書記官 作間 田中 谷森

元光院議定上奏賭博犯處分規則制定之事参事院勘查
 進呈之依テ回議ニ供ス

参議

大木	伊藤
山縣	西郷
山田	大山
松方	川村
佐三木	福原

秘第八十五号

別紙元老院上奏賭博犯處分規則制定ノ件取調候處同院修
正案ノ通ニテ不都合無之ニ付布告相成可然哉上申候也

明治十六年十二月廿六日

參事院議長福岡孝弟印

太政大臣三條實美殿

乾第四百拾九號

本月十九日下付有之候賭博犯處分規則制定ノ儀今廿五日
會議ニ於テ修正ヲ加フ一キニ決シ別冊議定案
勅裁ヲ仰キ候為ノ御上奏有之度候石修正ノ理由記載上奏
可致苦ニ候得共特ニ至急ヲ要セラル、ノ案却テ時日ノ費
一ニ了ラ恐レ候ニ付其理由ハ詳細ハ内閣委員參事院議官
尾崎三良參事院議官補黒田綱彦ヨリ具陳可致因テ此段御
領兼有之度候也

明治十六年十二月廿五日

元老院議長佐野常民

太政大臣三條實美殿

布告案

賭博犯ノ儀ハ刑法第二百六十條第二百六十一條ニ明文有之候一トモ
 當分ノ内行政警察ノ處分ニ屬シ東京ハ警視廳其他ハ地方官ヲシテ別
 紙賭博犯處分規則ニ依リ取締懲罰ノ事ヲ行ハシム
 右奉 勅旨布告候事

賭博犯處分規則

第一條 賭博ヲ爲シタル者ハ一月以上四年以下ノ懲罰及ヒ五圓以上
貳百圓以下ノ過料ニ處ス家屋ヲ貸與シ及ヒ見張ヲ爲シタル者等亦
同シ

博徒ニシテ黨類ヲ招結シ又ハ賭場ヲ開張シ又ハ兇器ヲ攜帶シ又ハ
四隣ニ横行スル者ハ一年以上十年以下ノ懲罰及ヒ五拾圓以上五百
圓以下ノ過料ニ處ス其招結ニ應シタル者ハ賭博ヲ爲サスト雖モ前
項ニ依テ處分ス

第二條 賭具及ヒ賭場ニ現存スル財物ハ何人ノ所有ヲ問ハズ之ヲ沒
入ス

第三條 賭博犯ヲ取押フルニハ何人ノ家宅ヲ問ハス何時タリトモ之

ニ立入ルコトヲ得但警察官巡查ニ其證票ヲ携帶ス一シ

第四條 此規則ヲ施行スルノ方法細則ハ警視總監府知事東京府知事除ク縣令

ニ於テ便宜之ヲ定メ内務卿ノ許可ヲ得テ施行スルコトヲ得

本月十九日下付セラレシ所ノ賭博犯處分規則制定ノ儀令
廿五日會議ニ於テ修正ヲ加フヘキニ決ス因テ其修正ノ箇
所ヲ朱書シ謹テ之ヲ上奏ス

明治十六年五月廿五日
元老院議長正四位勲一等佐野常民印

賭博犯處分規則制定之儀
右其院議定、被付候事

明治十六年十二月十九日

太政大臣三條實美

元老院議長佐野常民殿

司法省申奏賭博犯罪處分規則制定之事

右謹テ裁可ヲ仰ク

明治十六年十二月十八日

可

太政大臣三條實美印

左大臣熾仁親王印

参議大木喬任印

参議山縣有朋印

参議伊藤博文印

参議西郷従道印

参議山田顕義印

参議松方正義印

参議大山巖印

参議 川村純義印
 参議 福岡孝弟印
 参議 佐木高行印

百甲六九二号

明治十六年十二月十七日

大臣 三條 有柳川

内閣書記官 佐間 田中

司法省申奏賭博犯罪處分規則制定之事
 参事院勘査進呈
 呈又依之回議ニ供又

参議

山縣	大木
西郷	
山田	
大山	松方
福岡	川村
	佐木

別紙司法省申奏賭博犯罪處分規則制定ノ件審査スル左ノ如シ

右申奏ノ旨趣ハ賭博ノ取締及ヒ處罰トモ總テ行政警察ノ處分ニ任セ刑法賭博ノ條ヲ削除スルノ儀ニ即チ處分規則案六ヶ條ヲ呈出セリ然ルニ賭博ノ犯者タル猶密賣淫ノ甲地方ニハ夥多ナルモ乙地方ニハ寡ナルト一般ナルハケレハ賭博處分ノ儀モ密賣淫ノ例ニ倣ヒ當分ノ内地方官ニ委任セラレ然ル一レ去リナカラ其重タル稍重大ナルヲ以テ懲戒處分ノ綱領ヲ設ケ其區域ヲ廣シ各地ノ形勢ニ依リ其區域内ニ於テ寬猛適宜ニ處分セシメ候方現今ノ必要ト思考ス

右ニ由リ別紙ノ通修正ノ上御布告相成可然於上申候也

明治十六年十二月十七日

参事院議長福岡孝弟印

太政大臣三條實美殿

退ラ差急キ候儀ニ付至急議定相成候様御達相成度候事

總會議々決

布告案

賭博犯ノ儀ハ刑法第二百六十條第二百六十一條ニ明文有
之候一トモ當分ノ内行政警察ノ處分ニ屬シ東京ハ警視廳
其他ハ地方官ワレテ別紙賭博犯處分規則ニ依リ取締懲罰
ノ事ヲ行ハシム

右奉 勅旨布告候事

年月日

太政大臣

内務卿
司法卿

賭博犯處分規則

第一條 賭博ヲ為シタル者ハ一月以上四年以下ノ懲罰及

ヒ五圓以上二百圓以下ノ過料ニ處ス家屋ヲ貸與シ及

見張ヲ爲シタル者等亦同シ

博徒ニシテ黨類ヲ招結シ又ハ賭場ヲ開張シ又ハ光器ヲ携帶シ又ハ四隣ニ横行スル者ハ一年以上十年以下ノ懲罰及ヒ五十圓以上五百圓以下ノ過料ニ處ス其招結ニ應シタル者ハ賭博ヲ爲サスト雖モ前項ニ依テ處分ス

第二條 賭具及ヒ賭場・現存スル財物ハ何人ノ所有ヲ問ハス之ヲ没入ス

第三條 賭博犯ヲ取押フルニハ何人ノ家宅ヲ問ハス何時タリトモ之ニ立入ルコトヲ得

第四條 此規則ヲ施行スルノ方法細則ハ警視總監府知事東京府縣令ニ於テ便宜之ヲ定メ内務卿ノ許可ヲ得テ施行スルコトヲ得

参照

賭博 新律綱領

凡財物ヲ賭ニ博戲ヲ爲ス者ハ皆杖八十賭場物ハ官ニ入ル其賭房ヲ開張スル人ハ其列ニ與ラスト虽モ同罪飲食ヲ賭スル者ハ論スルヲ勿レ

若シ産業ナクシテ常ニ腰刀ヲ揆帶シ無賴ノ徒ヲ招結シ賭場ヲ開張シ四鄰ニ横行スル者ハ皆流一等

賭博條例 改定條例

第二百六十九條 凡賭博三犯以上ハ懲役一年

第二百七十條 凡賭場現在ノ財物ハ官ニ入ルト虽モ其田宅等不動産ニ係ル者ハ原主ニ還付シ官ニ入ルノ限リニ在ラス

第二百七十一條 凡博戲ニ用ル骰子骨牌ヲ賣ル者ハ賭

博者ト同罪再犯ハ一考ヲ加ヘ三犯以上ハ懲役一年
第二百七十二條 凡賭博ノ列ニ其ラスト虽モ母錢ヲ借シ
息ヲ收ルル者ハ犯人ト同罪

刑法

第二百六十條 賭場ヲ開張シテ利ヲ蓄リ又ハ博徒ヲ招結
シタル者ハ三月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ十円以上
百円以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百六十一條 財物ヲ賭シテ現ニ博奕ヲ為シタル者ハ
一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ五円以上五十円以下
ノ罰金ヲ附加ス其情ヲ知ラ房屋ヲ給與シタル者亦同シ
但飲食物ヲ賭スル者ハ此限ニ在ラス

第二百六十二條 財物ヲ驟集シ富籤ヲ以テ利益ヲ僥得ス

ルノ業ヲ與行シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ
處シ五円以上五十円以下ノ罰金ヲ附加ス

九年第一号布告

改定律例第二百六十七條私娼街賣條例相廢シ賣淫取締懲
罰ノ義ハ警視廳并各地方官ニ被任候條此旨布告候事

九年内務省乙第九号達

本年第壹号ヲ以テ改定律例第二百六十七條廢シノ義御布
告相成候ニ付テハ過料三十円以内懲戒六ヶ月以内適宜ノ
方法ヲ設ケ密賣淫取締一層行届候様處分可致此旨相達候
事

但取締方法當有一可届出事

刑法中

第四百二十五條 九ノ諸件ヲ犯シタル者ハ三日以上十日以下ノ拘留ニ處シ又ハ一山以上一山九十五考以下ノ科料ニ處ス

一
十箇ニ賣淫ヲ為シ又ハ其媒合容止ヲ為シタル者

十四年第六十四号布告

賣淫ノ義ハ刑法第四百二十五條第十項ニ明文有之候トモ當分ノ内其取締懲罰ハ従前ノ通東京ハ警視廳其他ハ地方官ニ委任ス

司法省第六八六一号

賭博犯處分規則制定ノ儀ニ付上申

賭博ハ卑シ其性質上ヨリ之ヲ論スルハ苟モ非義ノ利得ヲ企望スルモ自己ノ財物ヲ以テ自己ノ所好ニ任スル迄ニシテ罪惡ト称スルニ足ラサルニ似タリ故ニ各國ノ法律ニ於テハ其處分甚タ寛裕ナリ我邦ニ於テモ其處分漸次緩漫ニ流レ現行ニ非サレハ之ヲ罰セサルニ至ル然ルニ實際ヲ顧ルニ都鄙一般無賴放蕩ニ陷ラシムルモ賭博ナリ財產々業ヲ失ハシムルモ賭博ナリ爭論鬥毆ヲ促カスモ賭博ナリ詐偽賊盜ヲ為サシムルモ賭博ナリ總テ惡事醜行賭博ニ原因セサル者ハ殆ト稀ナル可シ抑モ新法實施前ハ刑ノ寬嚴ニ拘ハラス地方官ニ於テ樂分ノ取締ヲ為スヲ得タルヲ以テ未タ著明ナル惡結果ヲ見ルニ至ラスト雖モ既ニ今日ニ

至テハ官吏ヲ輕蔑スルノ惡風ト取締ノ嚴重ナラサルトニ
因リ殆ト言フ可カラサルノ弊害ヲ醸スニ至レリ速ニ之ヲ
制止スルノ方法ヲ求メスニハ良民蟄伏惡徒横行世治上ニ
多少ノ影響ヲ及サントス決シテ小事ニ非サルナリ蓋シ賭
博ノ事柄タルヤ普通ノ刑法ニ問ハスシテ行政上ノ懲罰ニ
付スル丁條理ニ於テモ穩當ニシテ且現時ノ弊害ヲ防厭ス
ルニ最モ適切ナル方法ヲ得一キモトス依テ別冊ノ通大
目ヲ定メ其處分ハ一切地方官ニ御委任相成候様致度至急
何分ノ御詮議相仰候也

明治十五年十二月二十日

司法卿大木喬任

太政大臣三條實美殿

御布告案

賭博ノ取締及ヒ其懲罰ハ總テ行政警察ノ處分ニ屬シ賭博
處分規則別冊之通相定メ刑法第二百六十條第二百六十一
條ヲ削除ス

右奉 勅旨布告候事

太政大臣三條實美

内務 卿山田顯義

司法 卿大木喬任

年 月 日

賭博犯處分規則

第一條 賭博ノ現場ヲ偵知シタル者ハ何人ノ家宅タルヲ問ハス直ニ之ヲ取押フルヲ得

第二條 賭博ヲ為シタル者及ヒ其關係人ハ五年以内ニテ期限ヲ定メ又ハ期限ヲ定メズ之ヲ勾置シ三百圓以内ノ罰金ヲ科ス

但シ拘置限内ハ重禁錮ノ刑ヲ受ケタル者ト均シク禁錮場ニ勾役ス

第三條 數回賭博ノ禁ヲ犯シ又ハ既ニ懲罰ヲ受ケタル後再ヒ之ヲ犯スモ其懲罰ハ前條ニ記載シタル定限ヨリ増加スルヲ得ス

第四條 賭場ニ現存スル賭具財物其他賭博ノ用ニ供シ又

ハ供セントシタル物件ハ他人ノ所有ニ係ルト否トヲ問
ハス之ヲ没入ス

但シ詐取竊取ニ係ル物件ハ此限ニ在ラス

第五條 賭博犯處分ニ付テハ上訴ヲ許サス

第六條 前數條ニ定メタル規則ノ外各地方官ニ於テ細則

ヲ設内務卿ノ許可ヲ得テ施行スルヲ得

賭博取締ノ儀建議

賭博ノ世ニ害アル固ヨリ人ノ熟知スル所ニシテ之ガ説ヲ
須タズ其辨明ナリト雖氏今其大概ヲ擧テ之ヲ言ハシニ凡
ソ其賭博ヲナス者初メハ些少ノ金錢ヲ賭ケ一時ノ戯樂ト
スルニ過ギサルモ或ハ意外ノ贏利ヲ得ルニ依リ貧婪ノ情
饜豆スルヲナク遂ニハ其家産ニ應セザル巨額ノ財物ヲ賭
ケ一敗シテ生計ヲ失ヒ或ハ初メ少シク不利ナルニヨリ一
贏以テ前失ヲ償ハント欲シ却テ連輸累敗スルモ勢ヒ自ラ
止ムヲ能ハズ終ニ産ヲ破リ家ヲ覆スニ至ル者比々皆是ナ
リ然シテ博徒タル者居常多クハ飽食煖衣生産作業ヲ事ト
セズ而シテ其博場ニアルヤ時アツテ許多ノ財貨ヲ贏得ス
ルモ徒ニ酒食ノ費淫遊ノ資ニ供スルノミニテ以テ又母ヲ

養、妻子ヲ育スルノ念慮アルニ非ズ其不利ナルニ當テハ衣服ヲ典シ田宅ヲ賣リ家族ヲシテ凍餓ニ陥ラシメ親戚隣保ヲシテ其餘殃ヲ被ラシムルモ敢テ顧念スルヲナク竟ニハ去テ山野ニ出沒シ盜賊剽奪ヲ縱ニスルノ外又為スベキノ事ナキニ至ル良家ノ子弟ト雖モ一タヒ唆誘ヲ受ケテ其群ニ入り其風習ニ傳染スル時ハ長ク其濁流ニ沈溺シテ復タ自ラ極テ能ハズ終身無頼ノ徒ト為リ其心ヲ悛ノ慮ヲ回シテ再ヒ力田強作ノ良民タルモノ甚タ稀レナリ以上言フ所ハ天下賭博ノ通患ナリ而當縣下ノ如キハ往年賭博淵藪ノ地タリシヲ以テ今復其弊害ヲ生ズルノ甚シキヲ見ルモノアリ曾テ維新前ノ景況ヲ聞クニ國內到ル處博奕盛ニ行ハレ無頼ノ徒其黨與ヲ結ヒ首長ヲ立テ大刀ヲ横タ一長槍ヲ提ケ白日市村ヲ横行シ富豪ヲ劫掠シテ財ヲ擄メ人ヲ殺

傷シ官憲ヲ畏憚ヒズ亦相聚テハ場ヲ張り席ヲ設ケ散レテハ此ノ暴行ヲ恣ニシ其害ノ及フ所擧テ數フベカラス或ハ郡衙ヨリ之ヲ勦除セントスル時ハ道レテ山林ニ潛ミ國境ヲ脱シ其警ノ稍弛フヤ復集テ郡ヲ成ス其出沒ノ常ナキ郡吏徒ヲニ奔命ニ勞スルノミ其効終ニ視ルベカラズ經年此風ノ行ハル、良家ノ老壯兒女ニ論ナリ村長里老神官僧侶ノ如キモ亦之ニ浸染シ家ニ郷ニ祭事宴會等苟モ人相集ルニ遇ハハ禮敬ノ何物タルヲ問ハズ即チ散ヲ投シ牌ヲ擲チ奇ヲ呼ヒ偶ヲ叫ヒ留連多日之ヲ世間無上ノ樂事トシ風俗壞類作業荒廢廉耻地ヲ拂ヒ狡黠以テ智ト為ス唯彼ノ無籍ノ博徒タル者民家ニ此事アルヲ聞クヤ突入恐嚇其財ヲ劫奪スルヲ以テ人之ヲ畏ル、官護ヨリモ甚シク之カ爲メ較亦誠慎シテ自恣スルニ至ラズ此際博徒タルモノ隱然此場

ノ威權ヲ持スル愛ニ郡衙ノ上、出ツルト云フ宜ベナリ曰
幕府治教ノ其際ニ行ハレガルヤ大政維新新律ヲ頒布セラ
レシヨリ其徒ノ首長タル者ハ前後捕獲セラレ死亡略盡キ
其他ハ概テ賭博ノ終為スベカラサルヲ知り家ニ就テ屏息
戒慎本業ニ従事セシニヨリ管内一時殆ント其跡ヲ絶ワシ
至レリ然ルニ明治七年以降賭博ノ現行犯ヲ獲ルニ非ザレ
ハ其罪ヲ問ハザルニヨリ司法省ノ指令ヨリ狡漢猾兇法ノ犯スニ易
ク避ルニ難カラザルヲ覺リ往年ノ宿弊頓ニ再燃ノ情況ヲ
呈シ犯者日々多ク其之ヲ犯スヤ豫メ奸細ヲ四方ニ配布シ
テ警吏ノ進退ヲ密告セシメ或ハ警吏不時ニ其場ニ進入ス
ルモ豫テ飲宴棋局等ノ器物ヲ備テ以テ忽チ博具ニ換シ毫
モ証認スベキノ形跡ナカラシムル等機変百出巧ニ法網ヲ
避クルガ故ニ警吏百方之ヲ蹤跡スト雖モ現行犯ヲ獲ル

甚タ難シ縱令他日ニ至リ發覺スルモ凡テ不問ニ付シ其畏
憚スル所ナキニ依リ其蔓延ノ速カナル市街村閭ニ論ナリ
農高婦女ニ別ナク之ヲ行ヒ彼ノ無賴徒ノ隱權ヲ博場ニ持
シ闖入掠財ノ懼レナキヲ以テ之ヲ維新前ニ比スルニ加フ
ル有テ讓ルコトナキノ景状ニ至レリ尋テ明治十四年刑法
治罪法實施以來愈法ノ犯レ易キニ乘シ弊害益加リ博徒ノ
團結四方ニ行ハレ猖獗年月ニ長レ殊ニ近時ニ至リ世上金
融壅塞ノ影響賭場ニ波及シ該業意ノ如クナラズ酒食淫遊
ノ資ニ充ルニ足ラザルヨリ其行為一変シテ類リニ良民ニ
妨害ヲ加ヘ或ハ入ノ吉山ニ投シ種々ノ難題ヲ云ヒ懸ケ或
ハ路上ニ出沒シ行旅又ハ婦女子ニ脅迫シテ金錢物品ヲ横
奪スル等宛モ旧政府時代ト一般ノ惡弊ヲ顯出シ人民為メ
ニ戒心シ甚シキニ至ラハ仮令脅迫ノ禍害ニ遭遇スルモ亦

其後害ヲ慮シ告訴セズシテ止ムモノアリ彼徒跋扈ノ状勢ヲ見ルニ足ル教化ヲ敷フシ治務ヲ修ムルノ今日彼ノ幕府季世ノ惡弊ヲシテ再敷セシムルハ實ニ慨歎ニ勝一ザル所ニシテ此風愈熾ナルニ及テハ懶惰盜竊ノ徒之ニ由テ増殖シ今ニ於テ別ニ之ヲ制止スルノ法ナクニバ其流弊ノ極ル所禍害實ニ測ルベカラズ抑モ現行犯ニ非ラザルハ其罪ヲ問ハセラレザル御主意ノ由テ出ル所ハ審ヒラカニシ能ハズト雖モ或ハ各國ノ制法ヲ斟酌セラレテ然ル歟法ノ寛ナルハ固ヨリ嘉ニスベシト雖モ開明ノ民ニ施ス事ヲ資テ未開ノ民ニ施ス事ハ前述ノ如キ弊害ヲ醸出シ來テ其嘉ニスベキ法ハ却テ人民ニ禍害ヲ被ラシムルノ媒介タルノ理ナキヲ保シ難シ謹テ之カ制壓方法ヲ考フルニ其害ノ深淺緩急各地方自ラ差異アリテ必ズシモ皆本縣ノ如クナラザル

ベシ然ルヲ若シ畫一ノ法ヲ以テ之ヲ制止セントセハ其地方ニ依リ或ハ適否アリテ行政上徒ニ支障ヲ生シ到底其目的ヲ達シ能ハザルベシ斯ニ其法ノ宜シキ所ヲ推索スルニ嚮ニ密賣淫ノ取締ヲシテ地方官ニ委任セラレタル例ニ倣ヒ自今賭博取締ノ儀モ暫ク地方官ニ委任セラレ各地ノ實況ニ應シ緩急宜シキヲ量テ適當取締ノ方法ヲ設ケシメラレタラニハ禍害ノ未タ熾ナラザルニ消滅セニテ甚タ難キニ非ルベシト信ズ右ハ地方ニ在テ親シク其景状ヲ視察スル所ニシテ實ニ須臾モ闕キ難キ形勢ニ付其情態並意見共忽卒具申ス若シ幸ニ鄙見ノ採ル所アリトセバ冀クハ速ニ御詮議被下度此段上陳仕候也

明治十六年十一月

山梨縣令藤村紫朗印

太政大臣三條實美殿

第壹號
賭博犯ノ儀ハ刑法第二百六十條第二百六十一條ニ明文有之候一トモ
當分ノ内行政警察ノ處分ニ屬シ東京ハ警視廳其他ハ地方官ヲシテ別
紙賭博犯處分規則ニ依リ取締懲罰ノ事ヲ行ハシム
右奉 勅旨布告候事

明治十七年一月四日

太政大臣三條實美
内務卿山縣有朋
司法卿山田頭義

賭博犯處分規則

第一條 賭博ヲ爲シタル者ハ一月以上四年以下ノ懲罰及ヒ五圓以上貳百圓以下ノ過料ニ處ス家屋ヲ貸與シ及ヒ見張ヲ爲シ其他總テ幫助ヲ爲シタル者亦同シ

博徒ニシテ黨類ヲ招結シ又ハ賭場ヲ開張シ又ハ兎番ヲ攜帶シ又ハ四隣ニ横行スル者ハ一年以上十年以下ノ懲罰及ヒ五十圓以上五百圓以下ノ過料ニ處ス其招結ニ應シタル者ハ賭博ヲ爲サスト雖モ前項ニ依テ處分ス

第二條 賭具及ヒ賭場ニ現存スル財物ハ何人ノ所有ヲ問ハス之ヲ没入ス

第三條 賭博犯ヲ取押フルニハ何人ノ家宅ヲ問ハス何時タリトモ之

ニ立入ルコトヲ得但警察官巡查ハ其證票ヲ携帶ス一ニ
第四條 此規則ヲ施行スルノ方法細則ハ警視總監府知事東京府除ク縣令
ニ於テ便宜之ヲ定メ内務卿ノ許可ヲ得テ施行スルコトヲ得

元老院上呈第八期報告書之事

右謹テ御覽ニ供ス

明治十七年一月七日

太政大臣三條實美印
左大臣 熾仁親王印



元乙七二ノ甲

明治十六年十二月廿一日

大臣

三條 有栖川

内閣書記官

谷野 田中

元老院進達第八期報告書之事

右回覽：供ス

参議

山縣	大木
西郷	
山田	
大山	松方
福岡	川村
	佐々木

大 敬 宣

明治十六年三月廿一日

第二局印

別紙元老院進達第八期報告書參事院勘査上申供高覽候也

甲第四〇九号

元老院第八期報告書別紙ノ通進達候ニ付供高覽候也

明治十六年十二月十九日 参事院議長福岡孝弟印

太政大臣三條實美殿

十六年十二月六日

丁第三百六十一号

本院第八期報告書明治十五年七月以降本年六月二至八一
週年間別冊之通候條及進達候也

明治十六年十一月廿九日

元老院幹事細川潤次郎
元老院幹事黒田清綱

太政大臣三條實美殿

三十三

別冊報告書畧

外務省上申ボスニア及ヘルゼゴウィナ兩國萬國電信條約ニ加盟之事

右謹テ奏ス

明治十七年一月十六日

覽

太政大臣三條實美印
左大臣熾仁親王印

外乙一三九号

明治十六年十二月廿七日

大臣 三條 有柳

内閣書記官

金間 甲

外務省上申ボスニア及ヘルゼゴウナ兩國萬國電信
條約ニ加盟之事

右回覽ニ供ス

参議

山縣	大木
西郷	伊藤
山田	
大山	松方
福岡	川村
	左木

川
政
官

外務省
政
官

明治十六年十二月廿六日

第一局印

別紙外務省上申ボスニア及ヘルゼゴウナ兩國萬國電信
條約：加盟ノ件参事院勘査濟供高覽候也

政
官

甲第四〇八号

別紙外務省上申ボスニア及ヘルゼゴヴナ兩國萬國電信
條約ニ加盟ノ件供高覽候也

明治十六年十二月十九日

参事院議長福岡孝弟印

太政大臣三條實美殿

大
政
官

公第一二八号

今般ホスニア及ヘルゼコウ井ナ之兩國萬國電信條約加盟
相成候旨本邦駐劄英國代理公使ヨリ別紙譯文写之通申越
候此段及上申候也

明治十六年十二月七日

外務卿井上馨

太政大臣三條實美殿

十六年十二月十日受

大
政
官

第七十八号

以書簡致啟上候陳ハボスニア及ヘルゼゴウ井ナ兩國儀千
八百八十年七月一日ヨリ萬國電信同盟加入致候ニ付同條
約第十八條ニ同盟ハ加入ノ儀ハ最後ニ會議ヲ開キタル國
ヨリ其他各同盟國へ通知スヘシトノ趣旨ニ照シ此旨閣下
ヲ經テ貴政府へ御通知可致趣我外務卿ヨリ訓令有之候且
右御通知方斯ク遷延候ハ畢竟右兩國加盟ニ関スル緊要ノ
諸手續此迄完結致サ、ルニ職由候趣モ併セテ閣下へ可申
述旨被命候

右申進候拜具

千八百八十三年十一月三十日

英國代理公使

文甲四四号

明治十六年十二月廿八日

大臣 三條

有柳川

内閣書記官

作開

田中

内務文部兩省連署同卒業證書及免許狀沒收之事參事院勸查進呈ス依テ回議ニ供ス

参議

山縣	大木
西郷	
山田	
大山	松方
	川村
	佐々木

トレンチ

外務卿井上馨閣下

横文略ス

明治十六年十二月廿八日

第二局印

別紙内務文部兩省伺卒業証書及免許狀沒收ノ件ハ參事院
意見ノ通御裁可相成可然哉仰高裁候也

甲第 四二五号

別紙内務省文部省伺卒業証書及免許状没収ノ件審査スル
處左ノ如シ

伺ノ要旨ハ官立公立師範學校卒業証書及府縣教員免許
状ヲ有スルモノ品行不正等ニシテ教員ノ資格ヲ失ヒタ
ル者府知事縣令ヨリ規則ノ明文ニ據リ卒業証書若クハ
免許状ヲ没収セントスルモ之ニ應セサル者アルトキハ
其執行ヲ了スル為メ警察官ヲシテ没収セシメ可然哉ト
ノ事ニシテ實際上不得止義ニ付伺ノ通ニテ可然ト認定
ス

右ニ由リ指令案左ノ通ニテ可然哉上申候也

指令案

伺ノ通

明治十七年一月十七日

明治十六年十二月廿七日

参事院議長福岡孝弟印

太政大臣三條實美殿

第三十條 教員ハ男女ノ別ナク年齢十八年以上タルハ

但品行不正ナルモノハ教員タルヲ得ス

第三十八條 小学校教員ハ官立公立師範学校ノ卒業證書ヲ有スルモノトス

但本文師範学校ノ卒業證書ヲ有セスト虽モ府知事縣令ヨリ教員免許状ヲ得タルモノハ其府縣ニ在テ教員タルモ妨ケナシ

十六年十月八日受

官立公立師範學校卒業證書及府縣教員免許狀沒收ノ儀ニ付伺

官立公立師範學校卒業證書及府縣教員免許狀ハ教育令第三十八條ノ明文ニ依リ正格ノ教員トナルヘキ資格ヲ確カムヘキ効力ヲ有スルモノタレハ同令第三十七條但書等ニ依リ教員タルヘキ資格ヲ失ヒタル場合ニ於テハ右卒業證書免許狀ヲ沒收セサルヲ得サルニ付府縣制定ノ規則中其明文ヲ掲ケシメ置候義ニ有之然ル處品行不正等ニシテ教員ノ資格ヲ失ヒタル者アリ府知事縣令規則ノ明文ニ據リ卒業證書若クハ免許狀ヲ沒收セントスルモ到底之ニ應セサルトキハ不得已儀ニ付其執行ヲ了スル為メ警察官ヲシテ沒收セシメ可然ト存候得共為念此旨相伺候也

一九六

明治十六年十一月六日

文部卿福岡孝弟
内務卿山田顕義

太政大臣三條實美殿

追テ本件ハ目下伺出候向モ有之候ニ付至急御裁可相成
度又本文府縣制定ノ規則ハ當省ヨリ示達ノ旨趣ニ基キ
タル儀ニ有之候間為御參按當省明治十四年第二十四号
第二十六号達相添候也

達畧ス

第貳拾四號

府縣

當省本年^一月第六號達小學校教員免許狀授與
方心得書ノ儀別紙ノ通改正候條自今右心得
書ニ據リ其規則取調可伺出且改正變更候節
モ同様可伺出此旨相達候事

但當省明治十二年^{十二}月第三號達ノ旨趣ニ
據リ學カヲ證明シタル者ハ別紙第一條第
二條合格ノ學カト等シキ以上ノ分ニ限り
更ニ檢定ヲ要セス該條合格ノ免許狀ヲ授
與シ苦シカラス候事

明治十四年七月八日

文部卿福岡孝弟

小學校教員免許狀授與方心得

第一條 官立公立師範學校ノ卒業證書ヲ有セ
スレテ小學校教員タラントスル者ニハ小學
初等科若クハ中等科若クハ高等科ヲ教授シ
得ルニ足ルノ學力アルヲ檢定シタルノ後該
等科ノ教員免許狀ヲ授與スルモトス尤小
學各等科中唱歌體操裁縫家事經濟及土地ノ
情況ニ因リテ加フル所ノ農業工業商業等ノ
一科若クハ之ヲ檢定セサルモ妨ケナシ
但小學高等科教員免許狀ヲ與ヘタル者ハ
亦中等科若クハ初等科ノ教員トナスコト
ヲ得ヘク中等科教員免許狀ヲ與ヘタル者
ハ亦初等科ノ教員トナスコトヲ得ヘキハ

勿論タルヘシ且右教員免許状ヲ與ヘタル者ハ皆訓導トナスコトヲ得ヘシ

第二條 唱歌體操裁縫家事經濟等ノ學科ニ関シテハ特ニ之ヲ教授スルモノヲ置キ又第一條合格ノ教員ヲ得難キ地方ニ於テハ一學科若クハ數學科ヲ教授シ得ル者ヲ合セテ合格教員ニ代用スルヲ許可スルコトアルヘシ此等ノ場合ニ於テハ各自ノ學力ヲ檢定シテ某學科ノ教授免許状ヲ授與スルコトヲ得但本文免許状ヲ與ヘタル者ハ準訓導トナスヘシ

第三條 教員免許状及某學科教授免許状ノ効ヲ有スヘキ年限ハ五箇年以内ニ於テ定ムヘシ

第四條 小學校教則ニ變更ヲ生シタルカ為メ教員免許状及某學科教授免許状モ亦變更セサルコトヲ得スト認ムル場合ニ於テハ前條年限内ト雖モ更ニ其要スル所ノ學力ヲ檢定シ免許状ヲ補正スヘシ

第五條 碩學老儒等ノ德望アリテ修身科ノ教授ヲ善クスル者若クハ小學各等科中土地ノ情況ニ因リテ加フル所ノ農業工業商業等ノ學術ニ長スル者ハ學力ノ檢定ヲ要セス特ニ該學科教授免許状ヲ授與シテ訓導トナスコトヲ得

但本文ノ場合ニアリテハ本人ノ姓名履歷

等ヲ具シテ文部卿ノ認可ヲ經ヘシ

第六條 品行不正ニ因リテ其職ヲ解罷スルト

キハ免許狀ヲ沒收スルモノトス

第七條 訓導準訓導ニ附屬シ授業生等ノ名ヲ

以テ其授業ヲ助ケル者ノ學力ヲ檢定スルト

否トハ地方ノ便宜タルヘシ

第八條 學力檢定ノ方法及免許狀授與ノ手續

等ハ府知事縣令ノ意見ヲ以テ適宜取調フヘシ

第貳拾六節

府縣

教育令第三十七條但書教員品行ノ儀ハ別紙規則ニ據リ檢定可致此旨相達候事

明治十四年七月二十一日

文部卿福岡孝弟代理

文部少輔九鬼隆一

學校教員品行檢定規則

第一條 學校教員ノ品行ハ左ノ一欸若クハ數
欸ニ觸ル、者ヲ以テ品行不正ト認ムヘシ
第一欸 懲役若クハ禁獄若クハ鎖錮ノ刑ヲ
受ケタル者

但贖金罰金ヲ納ムル能ハスレテ本文ノ
刑ニ處セラレタル者ハ此限ニアラス

第二欸 前欸ノ刑ヲ受ケ存留養親老小癡疾
婦女等ノ故ヲ以テ收贖ヲ聽サレタル者

第三欸 身代限ノ處分ヲ受ケ未タ辨償ノ義
務ヲ終ヘサル者

第四欸 荒酗暴激等總テ教員タルノ面目ニ
關スル汚行アル者

第二條 第一條ノ一款若クハ數款ニ觸ル、者
ハ學校教員ノ職ニ就カシムルヲ得ス又就職
ノ後ト雖モ其職ヲ停罷スヘキモノトス
但本文ノ場合ニ於テハ本人有スル所ノ師
範學校卒業證書教員免許狀ヲ沒收スヘシ
第三條 品行不正ト認メ學校教員ノ職ニ就ク
コトヲ許サ、リシ者及其職ヲ停罷シタル者
アルトキハ府知事縣令ヨリ其族籍姓名并ニ
事由ヲ具シテ文部卿ニ開申スヘシ
第四條 第一條ノ一款若クハ數款ニ觸ル、者
ト雖モ府知事縣令ニ於テ特ニ學校教員タラ
ズメントスルトキハ其族籍姓名并ニ事由ヲ
具シテ文部卿ニ伺出ヘシ

善第千九百五十三号

六月六日付ヲ以テ官立公立師範學校卒業證書及府縣教員
免許狀沒收之儀ニ付内務卿文部卿連署ヲ以テ伺相成居候
處右ハ至急ヲ要シ候ニ付速ニ御指令相成候様御取扱有之
度此段及御照會候也

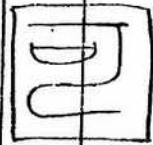
明治十六年十二月十八日 文部大書記官辻新次印

太政官書記官

御中

内務省上申栃木縣廳位置改正之事
右謹テ裁可ヲ仰ク

明治十七年一月十七日



太政大臣三條實美印

左大臣熾仁親王印

参議大木喬任印

参議山縣有朋印

参議伊藤博文印

参議西郷從道印

参議山田顯義印

参議松方正義印

参議大山巖印

559

参 議川村純義印
参 議佐木高行印

明治十七年一月十五日

大臣

三條 在栖川

内閣書記官 真勇

内務省上申栃木縣廳位置改正之事参事院
勘査進呈ス依テ回議ニ供ス

参議

大水印	山縣印
伊藤印	西郷印
井上	山田印
枡方印	大山印
川村印	福岡
佐木印	

別紙内務省上申枋本縣廳位置改正ノ件審査候
處事實適當ノ儀ト被存候ニ付上請ノ通布告相
成可然哉上申候也

参事院議長代理

明治十七年一月十五日

参議 山縣有朋印

太政大臣三條實美殿

内務省一通牒 (田部)

明治十七年一月廿一日

栃木縣廳之義是迄下都賀郡栃木町ニ設立有之
候處右ハ管内ノ一端ニ偏在シ到底全管内統理
上不便不少候ニ付管内中央ニシテ殊ニ國道ノ
要衝ナル河内郡宇都宮ハ移轉相成可然ト存候
御允可ノ上ハ別紙ノ通御布告相成度存候此段
伺候也

明治十七年一月十四日

内務卿山縣有朋

太政大臣三條實美殿

栃木縣廳位置ヲ下野國河内郡宇都宮ニ改定ス
右奉 勅旨布告候事

明治十七年一月廿一日

小池

太政大臣

内務卿

明治十七年一月十七日

大臣

三條

有栖川

内閣書記官

佐竹
谷森

田中

内務省伺賭博犯處分方之事参事院勘査進呈ス依テ回議
ニ供ス

参議

山縣	大木
西郷	伊藤
山田	
大久保	松方
	佐木

甲第五号

別紙内務省伺賭博犯處分ノ件審査スル處左ノ如シ

按スルニ本年第一号ヲ以テ賭博犯處分ノ儀布告相成候
處其布告中懲罰ニ處スルトアルハ禁錮ノ刑ニ處スル者
ニ準レ取扱候儀ニ付内務省ヨリ呈出相成タル違按ニ十
四年九月第八拾一号違監獄則第一條第五項禁錮ノ刑ニ處
セラレタル者ニ準レノ文字ヲ加一同省伺出ノ通り此際
御違相成可然ト認定ス

右ニ由リ違案尤ノ通ニテ可然哉上申候也

違案

第拾号

警視廳

府 縣 東京府

本年第一号布告ニ據リ懲罰ニ處シタル賭博犯人ハ明治

十四年刑部第八拾一號達監獄則第一條第五項禁錮ノ刑ニ
處セラレタル者ニ準服役其他ノ方法共總テ該則ニ依テ
處分スヘシ此旨相達候事

明治十七年一月二十一日 太政大臣

參事院議長代理

明治十七年一月十七日 參議山縣有朋印

太政大臣三條實美殿

内務省、通牒

明治十七年一月十七日

參照

十七年第七號布告

賭博犯ノ儀ハ刑法第二百六十條第二百六十一條ニ明文有
之候トモ當分ノ内行政警察ノ處分ニ屬シ東京ハ警視廳
其他ハ地方官ヲシテ別紙賭博犯處分規則ニ依リ取締懲罰
ノ事ヲ行ハシム

刑法

第二百六十條 賭博ヲ開張シテ利ヲ圖リ又ハ博徒ヲ招結
シタル者ハ三月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上
百圓以下ノ罰金ヲ附加ス
第二百六十一條 財物ヲ賭シテ現ニ博奕ヲ為シタル者ハ
一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下

ノ罰金ヲ附加ス其情ヲ知テ房屋ヲ給与シタル者亦同シ
但飲食物ヲ賭スル者ハ此限ニ在ラス
賭博ノ器具財物其現場ニ在ル者ハ之ヲ没収ス

第一條 監獄ヲ別テ九ノ六種ト為

一

二

三

四

五 懲役場 懲役ノ刑及ヒ禁錮ノ刑ニ處セラレタル

者ヲ拘留スルノ所トス

甲八

十七年一月十四日

賭博犯處分方之儀ニ付伺

本年第一号ヲ以テ賭博犯處分規則布告相成候處該犯人從
前刑法ヲ以テ處分候節ハ當然監獄署ニ於テ驅役候ニ付行
政之處分ニ付セラレ候テモ同様同署ニ於テ懲罰候様御達
相成度草案相添此段相同候條右ハ差掛タル儀ニ付迅速御
先可ヲ仰キ候也

明治十七年一月十二日 内務卿山縣有朋

太政大臣三條實美殿

六

御達案

廳府縣東京府

本年第一號布告ニ據リ懲罰ニ處シタル賭博犯人ハ監獄署

ニ於テ管束ニ服役其他ノ方法ハ總テ監獄則ニ照準ス可シ

此旨相達候事

年月日

太政大臣

内甲六五三號

明治十七年一月十一日

大臣 三條 有栖川

内閣書記官 作間 田中 谷 森

内務省勲章年金褫奪停止取扱手續之事参事院勸査進呈ス依テ回議ニ供ス

参議

山縣	大木
西郷	
山田	
大木	松方
	川村
	佐々木

七

569

明治十七年一月十日

第二局印

別紙内務省伺勲章并金襴奪停止取扱手續ノ件ハ參事院意見ノ通御裁可相成可然哉仰高裁候也

甲第四二四號

別紙内務省伺勲章年金褫奪停止取扱手續ノ件審査スル處
左ノ如シ

按スルニ巡査懲罰例ノ如キハ其實官吏懲戒例ニ異ナラ
サルヲ以テ榮譽ヲ汚辱スルノ行為アルニ於テハ均ク本
年第三十九号達ニ依リ其勲章年金ヲ停止又ハ褫奪スハ
キハ當然ノ儀ト認定ス

右ニ由リ指令按左ノ通ニテ可然哉上申候也
指令按

伺ノ通

明治十七年一月廿四日

明治十六年十二月廿七日

參事院議長福岡孝弟印

太政大臣三條實美殿

参照

勲章年金褫奪及停止取扱手續

第一條 勲章ヲ有スル者左ノ項目ニ觸ル、トキハ榮譽ヲ汚辱シタル者トス

第一項、

第二項 懲戒例及免黜條例ニヨリ免官シタル者

第三項、

明治九年六月八日番外達

三項 巡查及学校其他諸工場等ノ如キ別ニ懲罰規則有之分ハ本例ノ限ニアラス

巡查懲罰令

第一條 凡職務之規則ニ違背シ及ヒ怠慢失誤アル者ハ其情状ヲ審按シ俸給一ヶ月百分ノ一ヨリサカラス一ヶ月

ヨリ多カラサル罰金ヲ科シ輕キ者ハ呵責ニ止ム

第二條 凡犯状ノ職務ヲ耻カシムルニ係ル者ハ免職ス

第三條 凡罰金未タ完納セサル中免職死亡等ニ係ル者ハ

追徴スルヲ免ス

第四條 凡罰金ハ毎月ノ俸金ヲ控除シテ完納セシム

但^月俸ノ三分一ヲ過クルヲ得ス

第五條 凡官物ヲ遺失及毀損スル者ハ相當ノ罰金ヲ科シ

尚其代價ヲ賠償セシム

十六年十二月十五日發

井警言甲第二八八号

勲章年金褫奪停止取扱手續ニ付伺

本年第三十九号公達勲章年金褫奪停止取扱手續第一條第

二項ニ懲戒例及ヒ免黜條例ニヨリ免官シタル者ト有之候

處明治九年六月八日番外口達第三項ニ巡查及ヒ學校其他

諸工場等ノ如キ別ニ懲罰規則アルモノハ本例ノ限ニアラ

スト有之ヲ以テ看ルトキハ巡查懲戒例尙一ノ性質ニ有之

候仍テ案スルニ右第三十九号公達ノ懲戒例云々ト有之ハ

汎ク指シタルモノニシテ獨リ官吏懲戒例ニ止ラス巡查懲

罰ニ依リ免職シタルモノ、如キモ無論該項ニ準據シ取扱

可然儀ト存候得共為念相伺候條至急御指揮相成度候也
明治十六年十二月十一日

内務卿山田顯義

太政大臣三條實美殿

明治十七年一月十四日

大臣

三條

有栖川

内閣書記官

金作

田中

内務省伺地所轉質公證之事、參事院勘査進呈ス依テ回
議ニ供ス

參議

山縣	大木
西郷	
山田	
大山	松方
	川村
	佐々木

明治十七年一月十四日

第二局印

別紙内務省伺地所轉質公證ノ件ハ參事院意見ノ通御裁可
相成可然哉仰高裁候也

甲第四三一號

別紙内務省伺地所轉賃公証ノ件審査スル處左リ如シ

按スルニ甲ヨリ乙一賃入セシ地所ヲ甲承諾ノ上乙ニ於テ丙一轉賃スルハ法律上禁止ノ明文ナキ以上ハ民間融通ニ便益ヲ與フルニシテ則チ他人ノ地所ヲ借受賃スルモ同シ理由ナレハ戸長ニ於テ公証取計ニ且其轉賃ニ對スル金額ノ如キハ甲乙丙ノ契約ニ任セ妨ケナカルヘシ又建物及船舶ノ義モ地所同様公証取計ニ可然ト認定ス

右ニ由リ指令案左ノ通ニテ可然哉上申候也

指令按

伺ノ通

明治十七年一月廿四日

明治十六年十二月廿八日

參事院議長福岡孝弟

太政大臣三條實美殿

参照

六年第十八号布告地所書入賃入規則

第一條

金穀ノ借主(地主)ヨリ返済スヘキ証拠トシテ貸主

(金主)ニ地所ト証文トヲ渡レ貸主其作徳米ヲ以貸高ノ利

息ニ充候ヲ地所ノ賃入ト云フ

第二條

金穀ノ借主(地主)ヨリ返済スヘキ証拠トシテ貸主(金主)ニ

地所引当ノ証文ノミヲ渡シ借主ノ作徳米ノ全部又ハ一

部ヲ貸主ニ渡シ利息ニ充候ヲ書入ト云フ

島根縣賃問廿四年四月廿九日

他人ノ地所ヲ借受賃又ハ書入トナスハ法律布告上禁止ノ

明文ナキヨリ従来民間ノ慣習ニテ往々之レアリ然ルニ内

務省十年日誌第二十五号三重縣伺、令卿指令ノ趣ニテハ

部理代人ノ委任状ヲ受ケタルモノ、外他人ノ所有地ヲ借
受ケ質書入トナスハ一切不相成トアリ果シテ然ラハ民間
從來ノ慣習ヲ以テ説キ已ニ舉行ニ成規ノ如ク戸長公証ヲ
与フル第一條証書ノ如キモ都テ公判上質又ハ書入ノ効力
ヲ有セサルモノヤ

但第一條地所々有主ノ調印セシハ其地所ヲ質渡シ書入
トナシムルヲ承認セシテ則部理代人ノ委任状ヲ
与フルト全一ノ意味ヲ含蓄ス第二條ハ其由ヲ詳明記述
スルマテニテ其意第一條ニ同シ

明治九年内務省日誌第三号山梨縣伺、令御指令ノ趣ニテ
ハ建物ハ他人ノ所有ヲ借受質又ハ書入トナスモ妨ナキカ
如シ果シテ然ラハ地所ト建物ト何等ノ理由ヲ以テ一ハ借
質入ヲ為スヲ得一ハ不能モノヤ其區別如何

説明十年七月二十五日

他人ノ地所及建物ヲ借受質入書入ニ為スノ義ハ其所有主
ノ承認セシ証批判然タルモノハ其効力ヲ有スルモノトス

内務省質伺十三年九月二十七日

別紙静岡縣申候ハ地所質入期限中更ニ満期後ヲ約シテ他
書入ヲ為サント欲シ戸長ノ公証ヲ請求スルモノニ候処
該地所ハ若シ質入満期ニ臨ミ返金ニ能ハサル時ハ質取主
ノ所有ニ帰スルカ或ハ公賣ニ付スヘキヲ以テ其時ニ至リ
テハ書入ノ公証ハ無用ニ屬スヘシ此ノ如キ未未ノ書入ニ
公証ヲ与フルハ毎當ナラサルヤノ疑ヲキニ非スト虽モ本
末戸長ノ公証ヲ与フルハ唯地所ノ所有主或ハ二重抵当ノ
有無等ヲ調査シ別ニ無差支地所タルヲ証スルノ趣意ナ
ルヲ以テ未未ト現在トヲ向ハス公証ヲ与一可然依令質入

満期ノ際書入ノ公証ハ無用ニ屬スルヲアルモ不得止ノ事
変ニテ散テ戸長ノ職權ニ復スル等ノ一モナク却テ人民ニ
於テハ金融上ノ便宜モ有之義ニ付公証ヲ喚フヘキ者指令
ニ及ヒ可然哉

別紙靜岡縣ヨリ内務省ヘ伺

甲所有地ヲ乙ニ三ヶ年季ニ定テ質入中右期限後ヲ約シ
該地所ヲ甲ヨリ丙ヘ書入金負債用トサント欲シ戸長ノ
公証ヲ請求スル者アリ右ハ質入期限中ト虽モ乙丙ニ於
テ承諾ノ上申出候トキハ戸長ノ公証ヲ与ヘ可然哉

説明 三年三月三十一

戸長公証ノ義ハ其見解ノ通

九年第九十九号布告

金教等借用証書ヲ其貸主ヨリ他人ニ讓渡ス時ハ其借主ニ

証書ヲ書換ヘシムヘシ若シ之ヲ書換ヘシナサルニ於テハ
貸主ノ讓渡証書有之モ仍テ讓渡ノ効ナキモノトス此旨布
告候事

但相続人、讓渡候ハ此限ニテラス

神戸甲第三六六号

地所轉質公証ノ義ニ付伺

別紙神奈川縣具狀之趣致審按候處轉質ノ義ハ民間融通上
便益ヲ與フルモノニシテ別ニ差支ノ虞モ無之ト見込候間
甲ニ於テ承認ノ確証有之モノハ公証為取計可然哉

一轉質ハ質取主其物件ヲ他へ質入スルモノナレハ前キニ
甲乙間結約ノ金額ニ對シ増減セザル筋ニ候得共甲ニ於
テ承諾ノ上ハ乙丙ノ契約上過不足アルモ無妨義ト心得
可然哉

一建物船舶モ地所ト同様ニ為取扱不苦候哉

右權利即チ証書ノ讓渡ニ付テハ明治九年第九十九号布告
之旨モ有之候得共轉質ハ全ク讓渡ト性質ヲ殊ニスルモノ
ニ付神奈川縣申牒相添及上陳候條至急御裁令有之度候也
二二〇

十六年十二月十五日受

明治十六年十二月十日

内務卿山田顯義

太政大臣三條實美殿

庶第四百四百九十二号

質入書入戸長公証付與ノ義ニ付同

第一條

爰ニ甲乙丙ノ三人アリテ甲ヨリ乙へ質入シタル地所ヲ
甲乙契約セシ質地年限及其金額以内ヲ以甲承諾加印ノ
上乙ヨリ丙ニ又質入セントシ戸長ノ公証ヲ請モノハ之
レニ公証ヲ與不苦候乎
但シ年期及金額ノ超過スルモ甲人ノ承諾シタル上ハ
公証セシメ妨ナキ乎

第二條

第一條ノ如クニシテ書入ノ地所ヲ又書入トナシ質地ヲ
書入ニスルモ公証セシメ妨ケ無之乎

第三條

諸建物船舶モ前條ニ據リテ為取扱可然哉
右三條目下差掛リ候事モ有之候條神速御指揮相成度此段
相伺候也

明治十六年九月十五日

神奈川縣令沖守固

内務卿山田顯義殿

宮崎縣下日向國臼杵外貳郡分割ノ義

右便宜布告ノ後其院檢視ニ被付候事

明治十七年一月廿六日

太政大臣三條實美

元老院議長佐野常民殿

乾第四百貳拾六號

去月二十六日下付有之候宮崎縣下日向國臼杵外貳郡分割ノ儀令四日本院ノ檢視ヲ經過シ本案致奉還候條御上奏有之度候也

明治十七年二月四日

元老院議長佐野常民

太政大臣三條實美殿

去月二十六日下付セラレシ所ノ宮崎縣下日向國臼杵外貳
郡分割ノ儀今日本院ノ檢視ヲ經過ス仍テ本案ヲ奉還シ
謹テ之ヲ上奏ス

明治十七年二月四日 元老院議長正四位勲一等佐野常民印

第三號

明治十一年八月第拾七号布告郡區町村編制法ニ依リ宮崎縣
下日向國臼杵那珂北諸縣ノ三郡ヲ左ノ通分割ス

西臼杵郡 北臼杵郡

北那珂郡 南那珂郡

北諸縣郡 西諸縣郡 東諸縣郡

右奉 勅旨布告候事

明治十七年一月二十六日

太政大臣三條實美

内務 卿山縣有明

内務省伺宮崎縣下分郡之事

右謹テ裁可ヲ仰ク

明治十七年一月廿三日

太政大臣三條實美 印

左大臣熾仁親王 印

参議大木喬任 印

参議山縣有朋 印

参議伊藤博文 印

参議西郷従道 印

参議山田顯義 印

参議松方正義 印

可

参議 大山 巖印
 参議 川村 純義印
 参議 佐々木 高行印

内甲 大五 六 號

明治十七年一月九日

大臣 三條 有栖川

内閣書記官 作間 田中

内務省伺宮崎縣下分郡之事参事院勘査進呈ス依テ回議
 供ス

参議

山縣	大木		
西郷			
田			
大山	松方	川村	佐々木

明治十七年一月九日

第二局印

別紙内務省伺宮崎縣下分郡ノ件参事院審査上申ノ通御裁
可相成可然哉仰高裁候也

甲第四二七號

別紙内務省伺宮崎縣下分郡ノ件審査スル處左ノ如シ

按スルニ宮崎縣下分郡ノ儀ハ人情風土ノ異別ヲ熟察シ
郡衙配置ノ宜ヲ得タルモノニ付御裁可ノ上布告相成可
然ト認定ス

右ニ由リ布告案左ノ通ニテ可然哉上申候也

布告案

明治十一年八月第拾七號布告郡區町村編制法ニ依リ宮崎
縣下日向國臼杵那珂北諸縣ノ三郡ヲ左ノ通分割ス

西臼杵郡 埴臼杵郡

北那珂郡 南那珂郡

北諸縣郡 西諸縣郡 東諸縣郡

右奉 勅旨布告候事

十七年二月一日

大 政 官

十七年一月廿六日

大政大臣
内務卿

明治十六年十二月廿八日 参事院議長福岡孝弟印

太政大臣三條實美殿

元老院檢視布告同時檢視

参照

地方分畫處分規程 三年十月分裁定

一道國府縣郡区ノ廢置分合及名称変更ノ事

右太政官ニ於テ裁議一般ニ布告ス

郡區町村編制法

第九條 第三條第四條第七條第八條ノ施行ヲ要スルトキ

ハ府知事縣令ヨリ内務卿ニ具狀シ政府ノ裁可ヲ受ク可
シ

但町村区域名称ノ変更ハ内務卿ノ認可ヲ受クヘシ

第三條 郡ノ區域廣濶ニ過キ施政ニ不便ナルモノハ一郡

ヲ畫レテ數郡トナス

東西南北上中下
某郡ト云ハ如シ

宮地甲第五七号

十六年十二月十七日受

宮崎縣下分郡之義ニ付伺

宮崎縣令赴任以來郡衙配置ノ適否ニ注意シ別紙ノ通分郡之義上申致候其區分ノ方適當ト被存候ニ付實行為致度乃
于明治十三年第十四号布告第九條ニ依リ仰上裁候也

明治十六年十二月十三日

内務卿山縣有朋

太政大臣三條實美殿

追申縣令在京中御指揮相成候様致度ニ付至急御詮議ヲ
仰々候也

京第壹号

分郡之儀上申

當縣下日向國ハ五郡三百九拾貳町村及別拾七万七百九拾
 町余 山脉縦横ニ亘リ國內ヲ数部ニ分割セリ往時ハ五藩
鹿兒嶋藩 高鍋藩 肥前藩 佐土原藩 延岡藩 一縣四幕領ノ分領スル所タルヲ以テ各地
 各其人情風習ヲ殊ニセリ抑廢藩置縣以來ノ沿革ハ姑ク舍
 キ鹿兒嶋縣管轄中郡區編制以來去ル明治十四年六月迄ハ
 四郡役所白杵郡 延岡郡 宮崎郡 諸縣郡 都城 諸縣郡 役所 兒湯郡 高鍋郡
 ヲ置キ續テ今年今月更ニ兒湯郡役所ヲ廢シ那珂郡 那珂郡 役所 那珂郡役所ニ
 合併シ尔来全國五郡三郡役所ノ管理ニ歸シ候処谷郡役所
 共其管轄區域廣濶ニ過キ廣葉或ハ二拾余里ニ涉ルモノアリ
 リ中間崎嶇險隘ノ峻坂ヲ踰ニ二日程ヲ費スニアラサレハ
 所轄郡役所ニ到着スル能ハサルノ不便アリ且ヤ其人情風

俗ニ至テモ各種相異ナル地方ヲ一郡役所ノ下ニ統轄スル
ヲ以テ施政上百事阻碍渋滞ノ憂甚カラス故ニ地形ノ便否
ト人情ノ異同ニヨリ縣内ニ八郡役所ヲ置キ之ヲ分轄スル
ニアラサレハ到底治政ノ宜キヲ得ル能ハス人民ニ於テモ
其地勢ノ不便ト人情風習ノ異同アルヲ唱一郡役所増置ヲ
請願スルモノ續々有之殊ニ本年通常縣會ニ於テモ議會ヨ
リ郡役所増置ノ建議書ヲ差出シ候様ノ次第ニテ實ニ縣内
人民一般ノ希望ニ有之而シテ地方費經濟ノ度如何ヲ考案
スルニ今縣内ニ八郡役所ヲ置キ平均一郡役所三千五百圓
トスルモ合計貳万八千圓ニシテ本年度三郡役所ノ經費尅
万五千余圓ニ比較シ一万式千余圓ヲ増加スルニ過キサレ
ハ是亦散テ負擔ニ苦シム所無之輝實赴任以來管内各地ヲ
巡回シ親シク其狀況ヲ察スルニ到底之ヲ増置シ八郡役所

トナスノ止ムヲ得サルヲ信認候間左ニ設置見込ノ箇所及
分郡相成ニキ區域ヲ取調開陳致候
一曰杵郡ハ別紙甲号圖面中黄色及茶褐色ノ兩色ニ跨リ延岡
郡役所ニテ一田統轄候處其區域廣濶ニ過キ郡内ノ西部茶
褐色ノヨリ延岡郡役所ニ至ルハ殆ト二拾里許ニシテ右茶
褐色中其北部ヲ總稱シテ高千穂ト云ヒ其南部ヲ椎葉山ト
稱シ突兀タル山脉ヲ以テ黄色ノ部分ト境界ヲ阻隔シ天然
ノ地形ヨリ之ヲ觀ルモ全然別天地ノ觀ヲナセリ且其人情
ニ至テモ茶褐色ノ部分ハ山中ニ僻在スルヲ以テ概ネ純魯朴
直ニシテ東部黄色地方ノ伶俐ナルニ似ス三田井ハ山中ノ
小繁華ノ地ナルニヨリ同所ニ郡役所ヲ置キ茶褐色部分一
田管轄セシメ東部黄色部ハ從來ノ如ク延岡郡役所ニテ管
轄セシメ候時ハ地理ノ便利人情ノ異同兩ナカラ其宜シキ

ヲ得可申依テ右茶褐色ノ部分ヲ西白杵郡トシ東部横色ノ部ヲ云トシ東白杵郡ト分郡相成度候

一見湯郡ハ別紙甲号圖面中浅緑色ノ部ニシテ前述ノ如ク明治十四年六月以前ハ高鍋ニ郡役所ヲ設置之アルニ付今其舊ニ復シ同所ニ郡役所ヲ置キ同郡一田管轄セシメ度候一那珂郡ハ別紙甲号圖面中黄色及浅緑色ノ两部ニ跨リ地勢狭長南北二拾余里ニ亘リ南端ノ一部ヲ福島ト称シ旧高鍋藩ノ領地タリ其餘浅緑色ノ部分及黄色ノ中央ニ至ル迄旧飲肥藩領ニシテ黄色ノ北部ハ旧佐土原藩ノ領地トス旧飲肥藩ノ領地中分テ飲肥清武ノ二部トシ中間山仮屋ト称スル險坂アリテ地勢ヲ横断シ南部北部トモ判然其區域ヲ異ニセリ現今两部共宮崎郡役所ニ屬スレトモ南部福島地方ヨリ宮崎ニ至ルハ行程凡ソ貳拾余里加ルニ山仮屋ノ險坂

アリテ往来甚便ナラサルヲ以テ右山仮屋以南即チ圖面中浅緑色ノ部分ヲ割テ一郡トナシ飲肥ニ郡役所ヲ設置致度而シテ北部黄色ノ部分ハ區域褊小ナルヲ以テ別ニ一郡役所ヲ設ケス從來ノ如ク宮崎郡役所ニ合併統轄セシメ度依テ右浅緑色ノ部分ヲ南那珂郡ニ黄色ノ部分ヲ北那珂郡ト分郡相成度候

一北諸縣郡ハ別紙甲号圖面中茶褐色黄色堇花色ノ三部ニ跨リ往時ハ概テ旧鹿兒島藩ノ封土ニ屬シ各郷ニ外城ヲ置テ之ヲ管轄セリ現今都城ニ北諸縣郡役所ヲ置キ三部茶褐色黄色堇花色ヲ統轄スルモ域内峻嶺險崖各地ニ相聳一テ土地ヲ區劃ス特ニ圖面中茶褐色ト黄色ノ間ノ如キ東霧島嶽ノ山脉蜿蜒東方ニ連リ地勢ヲ分劃セリ其吉田地方部黄色ヨリ郡役所ニ至ルハ里程凡ソ拾六里余中間險路峻坂ノ阻ア

ルヲ以テ往來甚艱ナリ且人情風習ニ至リテモ茶褐色ノ部
ハ域内中央ニ都城北蘇郡役所
所在ノ地ナリアリテ近傍各郷ヨリ輻湊スル
産物ヲ各地ニ販運シ往來交通ノ繁キヨリ人民稍活潑ノ風
ヲ存シ黄色地方トハ大ニ其趣ヲ異ニセリ故ニ茶褐色ノ部
ハ從來ノ如ク現今ノ北諸縣郡役所ノ管轄ニ屬シ黄色ノ部
ハ小林ニ郡役所ヲ置キ之ヲ管轄セシメ度而シテ圖面中莖
花色ノ部ハ鹿兒島藩治中ハ黄色ノ部ニ界スル紙屋ト稱ス
ル地ニ関門ヲ設ケ紙屋以西即黄色ノ部ヲ関内ト稱シ莖花色ノ
部ヲ関外ト稱シ大ニ其取扱ヲ異ニセルヲ以テ今日ニ至ル
マテ其遺風尚存シ紙屋以内ト以外トハ人情自ラ氷炭相異
レリ且紙屋ノ地タル昔時特テ以テ藩國ノ固トナス地タル
カ如ク通行甚便ナラス故ニ之レカ地勢ヲ察シ之レカ人情
ヲ考フルニ到底同一郡役所ノ管轄ニ屬シ難シ今試ニ黄色

ト莖花色ノ兩部ヲ合シ小林ニ郡役所ヲ置キ莖花色ノ部分
ヲ之レニ屬センカ高岡地方即莖花色ノ部ノ人民ハ紙屋ノ嶮
ヲ踰一遠ク山中ニ入ルノ嫌アリ且ツ事ノ縣廳郡役所ノ兩
方ニ関スルアレハ遠ク山中ノ郡役所ニ至リ然后再ヒ返テ
縣廳ニ行カサル可カラサルノ煩勞アリ然ラハ高岡ニ郡役
所ヲ置キ黄色地方ヲ之レニ屬センカ是亦紙屋ノ嶮ヲ往復
スルノ不便アリ是故ニ黄色ノ部ト莖花色ノ部トハ畢竟同
一郡役所ニ屬シ難シ尤莖花色ノ部ハ域内ノ幅員ヨリ言フ
時ハ宮崎郡役所ニ合併スルモ不可ナキ如シト虽モ宮崎ハ
往時曰幕領ニシテ谷地ヨリ移住ノ人民輻湊スル所ニシテ
高岡地方即莖花色ノ部分トハ是亦人情風俗大ニ其趣ヲ異ニスルヲ
以テ同一郡役所ノ下ニ屬シ難シ事情右ノ如リナルニ依リ
現今北諸縣郡中ニ三郡役所ヲ置カサル一カラサルカ故ニ

圖面中茶褐色ノ部ヲ北諸縣郡ニ黃色部ヲ西諸縣郡ニ蓮花
色ノ部ヲ東諸縣郡ト分郡相成度候

前數項ニ開陳セシ各區域内ノ里程ノ遠近ハ別紙乙号圖面
中谷線路ニ記入シ其町村名人口戸數及別地價等ハ別紙丙
号ノ通りニ有之候間甲々御詮議相成度此故上申候也

明治十六年十一月廿六日

宮崎縣令田邊輝實印

内務卿山田顯義殿

甲乙号圖面及丙号書類ハ原書
ニ付載ス

第三號

明治十一年^甲第七號布告郡區町村編制法ニ依リ宮崎縣下
日向國臼杵郡那珂北諸縣ノ三郡ヲ左ノ通分割ス

西臼杵郡 北臼杵郡

北那珂郡 南那珂郡

北諸縣郡 西諸縣郡 東諸縣郡

右奉 勅旨布告候事

明治十七年一月二十六日

太政大臣三條實美

内務卿山縣有朋

本年第三號布告中

北臼杵郡、東臼杵郡ノ誤

明治十七年二月十三日

内閣書記官

本年第三号布告中左之通正誤御取計相成度此段及御照會
候也

本年第三号布告中北臼杵郡、東臼杵郡ノ誤

明治十七年二月九日

参事院書記官印

内閣書記官

御中

内甲六五九號

明治十七年一月十一日

大臣三條 有樹

内閣書記官作朋 田中

内務省上申警部長以下正帽正服改正之事参事院勘査進呈又依テ回議ニ供ス

参議

山縣	大木	松方	川村	佐藤
西郷				
山岡				
大木				

十

明治十七年一月十日

第二 局印

別紙内務省上申警部長以下正帽正服改正ノ件ハ參事院意見ノ通御施行相成可然哉仰高裁候也

甲第四三二號

別紙内務省上申警部長以下正帽正服改正ノ件審査スル処
左ノ如シ

案スルニ警察官ハ人民ニ對シ威容莊嚴ヲ要スル等ノ事
情アルヲ以テ從來ノ正帽正服ヨリ其裝飾ヲ精クシ更ニ
之レカ制式ヲ改メントスルハ宜キヲ得タルノ意見ノミ
ナラス且從來ノ服制ハ警視官ノ服制ト對比スルニ其精
粗ノ不權衡甚キモノアリ依テ呈案ノ如ク改正セハ其權
衡ヲ得候義ニ付上申ノ通御裁可ノ上違相成可然ト認定
ス

右ニ由リ違案左ノ通ニテ可然哉上申候也

違案

内務省呈按ノ通

明治十六年三月二十日

参事院議長福岡孝弟印

太政大臣三條實美殿

内務省一通牒

明治十七年一月廿日

以下

参照

第十三号

警部以下正帽正服并提燈ノ儀別紙圖式ノ通制定候條此旨相違候事

但帶剣ノ儀ハ従前ノ通適宜ノ制ヲ用ヒ不苦候事

明治十五年二月廿一日

太政大臣

別紙下ニアリ

十六年十二月廿日受

乾警甲第三八一号

警部長以下正帽正服改正ノ義上申

警部長以下正帽正服改正之儀十五年二月第十三号ヲ以テ御達之趣モ有之候處其裝飾頗ル粗ニシテ之ヲ東京警視官ノ服章ニ比スレハ其精粗同日ノ論ニアラス抑警察官ナル者ハ威容莊儼ナラサレハ威信ニモ關スルノ事情不少特ニ開港場等ニ在テハ其情實有之趣ニ付此際別紙制表圖式之通改正御達相成度則テ御達案ヲ具シ此段上申候也

明治十六年十二月十五日

内務卿山縣有朋

太政大臣三條實美殿

二二三

大

政

書

追テ警部長以下平日職務ニ従事スル際着用スル略服之儀モ一定之制無之區々ニ有之候處本文同様之事情有之儀ニ付今回更ニ一定ノ製式ヲ以テ當省ヨリ可及達ト存候此段豫メ添申候也

別紙制表圖式ハ原書ニ付載ス

御達案

第拾貳号

府 縣東京府

明治十五年二月第十三号達警部長以下預備服制表圖式左ノ通改正候條此旨相達候事

明治十五年一月廿六日

内甲六六二號

明治十七年一月十四日

大臣

三條 有柳

内閣書記官

谷 作 野 郎

内務大藏兩省連署伺勸業補助費之事參事院勘査進呈ス
依テ回議ニ供ス

参議

山縣	大木
西郷	
山田	
大山	松方
	川村
	佐木

明治十七年一月十四日

第二局印

別紙内務大藏兩省伺勸業補助費ノ件ハ參事院意見ノ通御
指令相成可然哉仰高裁候也

甲第四號

別紙内務大藏兩省伺勸業補助費ノ件審査スル處左ノ如シ
按スルニ地方税規則第三條中ニ勸業費トノミアリテ勸
業補助費ノ目ナシト雖モ之ヲ要スル場合ニ於テハ勸業
費ヨリ補助スルハ不得止儀ニシテ別紙参照公立病院費補
助ノ類例モアレハ上申ノ通御聞届相成可然ト認定ス
右ニ由リ指令案左ノ通ニテ可然哉上申候也

指令案

上申ノ趣聞届候事

明治十七年一月廿五日

参事院議長代理

明治十七年一月十日

参議山縣有朋 印

太政大臣三條實美殿

参照

地方税規則

第三條 地方税ヲ以テ支辨ス一キ費目左ノ如シ

一 勸業費

十四年二月九日内務卿伺

地方ニ於テ數郡若クハ一ヶ國ノ協同ヲ以テ設立致シ候公
立病院費用ノ義ハ其区域内ノ出金ヲ以テ支辨可致ハ勿論ノ
義ニ候一氏其病院タルヤ縣下一般ノ為メニ幾分ノ公益ヲ
與フルモノニシテ殆ニト縣立病院ノ代用ニモ可相成規模

ヲ備一府縣會ニ於テモ亦之ヲ是認シ該院費用ノ幾分ヲ地
方稅ヨリ補助セシコトヲ承諾スルノ場合ニ於テハ地方稅
費目第四項衛生及病院費ノ内ヨリ其費用ノ幾分ヲ補助為
致候ハ不苦義ニ可有之畢竟其市區ニ於テ右公立病院ノ設
立無之ハ巨多ノ地方稅金ヲ費シ更ニ丁縣立病院ヲ設置
セサルハカラサル義ニ候處幸ニ此公立病院アリテ之ニ幾
分ノ補助金ヲ與一以テ人民ノ幸福ヲ保持スルヲ得ハ至極
兩便ノ義ニ有之且又公立中學校費ノ如キハ地方稅ヲ以テ
補助スルヲ得ヘキ旨已ニ御裁可相成居候ニ付テハ病院ノ
義モ人民ニ對スル公益ノ点ニ於テハ毫モ差異無之義ト存
候間府縣會決議ヲ經候分ハ補助ノ義聞届候様致度此故
及上申候云々

指令 十四年二月二十八日

上申ノ趣聞届候事

坂底甲第六一五号

十六年三月廿日受

勸業補助費之儀ニ付上申

十五年甲第二號布告ヲ以テ第三條地方稅費目ヲ改正セ
 レ右費目中補助費ノ目アルモノハ區町村土木費ト區町村
 教育費トノ二費目アルノミ其他ハ地方稅ヲ以他ノ費途ヲ
 補助レ得可キノ明文無之然ルニ勸業委員ノ年々當勸業各
 會博覽會共進會物産品評會物産陳列場等ノ開設及其維持
 又ハ農商工事ノ改良及ヒ該統計ノ調査ニ關スル費途ニシ
 テ其補助ヲ要スル事實不尠既ニ本年度ノ府縣會於テ地方
 稅中勸業費ヨリ該費補助之儀可決致候向モ有之尤モ右等
 ノ如キ場合ニ於テハ地方稅規則第三條末項ニ依リ特別費
 目創設方政府ノ裁可ヲ得可キ筈ニ候處右手續キヲ履行セ
 ントスレハ臨時府縣會ヲ開設セサル一カラス且ツ十七年

二二五

數

繪畫共進會開期ニ相迫リ候儀ニ付既ニ府縣會ニ於テ該費
ノ幾分ヲ地方稅ヨリ補助スルノ議ニ可決シ有之府縣ヨリ
伺出ツル場合ニ於テハ地方稅費目第十五項勸業費ノ内ヨ
リ補助之儀聞届候様致度右八十四年二月中當省ヨリ伺公
立病院費補助之儀御裁可相成候適例ニ有之儀ニ付此段及
御稟議候條至急仰御裁可候也

明治十六年十二月十八日

大藏卿松方正義

内務卿山縣有朋

太政大臣三條實美殿

追テ本文同様ノ件外府縣ヨリ伺出候節ハ兩省有限聞届度
ト存候此旨添申候也

林
敬
書

内甲四〇四號

明治十七年一月十八日

大臣

三條

有栖川

内閣書記官

谷金作
森間

田中

内務省伺瀬川沿流攝河國界裁定之事参事院勘査進呈ス
依テ回議ニ供ス

参議

山縣	大木	伊藤	松方	川村	佐々木
山田					
大山					

明治十七年一月十七日

第二局印

別紙内務省伺澱川沿流攝河國界裁定ノ件ハ奉事院意見ノ
通御指令相成可然哉仰高裁候也

甲四〇四

十六年七月廿日受

阪地十四七五四号

澱川沿流攝河國界裁定之義伺

大阪府下澱川沿流攝河兩國境界從來不明瞭之場所裁定方
同府ヨリ別紙之通申出候。付審案候處別紙圖面第二号點
ヨリ三拾壹号點。至ル黒線之通攝津河内ノ國界ト御決定
相成候様致度右御裁可之上ハ達方等例之通當省。於テ可
取計候依テ圖面相添此段相伺候也

明治十六年六月廿日

内務卿山田顯義

太政大臣三條實美殿

甲第四三四號

別紙内務省伺澱川沿流攝河國界裁定ノ件審査スル處左ノ如レ

關申ノ要領ハ攝河兩國ノ經界タル古來澱川川筋ヲ以テ其經界トナシ有之候處經年ノ久シキ水流ヲ變シ附寄洲出來沿岸村民之ヲ浸墾シ漸次地形變換各村所屬地錯雜ヲ生シ候ヨリ人民爭論絶一ナルニ依リ現今澱川ノ中心ヲ測量シ其線路ヲ以テ更ニ兩國ノ國界ト確定シ將來河流ノ變遷スルモ永久其界線ニ据置カントスルニアリ然レ氏河流ノ中心ヲ以テ國界トスルモノハ只其河川中央ヲ以テ經界トスルトスル迄ノコトニシテ悉ク其經界ヲ測量シ界線ヲ確定シ之ヲ示スモノニ非ス故ニ川ノ中央ヲ以テ國界ト定ムルモノ、如キハ其流域ノ變換ニ遇ハハ國界

圖面略ス

モ亦之ニ從フヘキハ古来ノ慣例タリ然ルヲ獨リ澱川ノ如キ之ニ及シ今般測定ノ線路ヲ以テ國界ト確定スルニ至テハ他日河心ノ變換スルコトアラハ現今水中ノ界線ハ陸地ニ存スルモ難計然ルトキハ實際ノ地形上ニ甚タ不都合ヲ生シ可申候間其界線ヲ確定セス只撰河兩國ノ國界ハ古来ノ慣例ニ依テ澱川流域ノ中央ト相定ノ可然ト認定ス

右ニ由リ指令案左ノ通ニテ可然哉上申候也

指令案

伺ノ趣ハ澱川流域ノ變遷ニ隨ヒ其中央ヲ以テ國界ト定ムベキ事

明治十七年一月廿八日

明治十六年十二月廿八日

參事院議長福岡孝弟印

太政大臣三條實美殿

澱川沿流攝河國境定方伺

當府邊に攝津河内兩國々境ノ義ハ古來澱川々筋ヲ以テ其
 界域ト認定茲五々變近年川中附洲所屬ノ事ヨリ兩國沿岸
 ノ村々於テ頻リニ紛議お生レ今以テ治定ノ場合ニ至リ兼
 々今其紛議ノ要領ヲ概陳セシニ澱川北岸即チ攝津國岩村
 ノ申立ツル所ハ古來該河流ハ攝津ノ澱川ト唱フルモノ
 之未タ河内ノ澱川ト稱スルヲ聞カス現ニ川中附洲及流化
 地ノ過半ハ攝津五谷村ノ所屬タルヲ據地誌其他四地ニ據
 テ之ヲ証スヘキニ付攝河ノ國界ハ澱川南岸堤防下ニ有之
 云々又其南岸即チ河内五谷村ノ申述ヲ破クニ從來攝河ノ
 境界ハ澱川中央ニ在ルヲ友民ノ俱ニ確認スル所ニシテ各
 村地先ニ於ケル附洲又ハ流作地ノ如キ位ニ着免狀其地書

録
 數
 當

形、之登記有之假令之ナキモ川ノ中央ヲ以テ徑界トナス
ハ一般ノ通則古来ノ慣行ナルニ付澱川中央ヲ以テ攝河ノ
西界ト確定ス成度之、以上雙方陳スル処ヲ對照審按スル
ニ抑モ澱川ノ流域タル往古ハ頗ル廣闊ノモノナリシ、后
年其南岸ニ沿テ土砂淤積シ遂ニ今日ノ現形ニマテ狹縮
セシモノトモ見、現ニ其南岸堤防ヲ距ル半里許耕地中ニ
茨田古堤ノ存在シ且川中流作地ノ過半攝津國各村ノ扱地
帳免狀等ニ登記アルヲ以テ之ヲ証スルニ足ル然ラハ攝津
國各村ノ申供モ亦全ク撥ル所ナキニアラス然レモ經年ノ
久シキ確ト事變ヲ攷ルニ由ナク且河内國各村ニ於テモ幾
分流作ノ証據アルハ亦必シモ川中全域ヲ攝津國ノ所屬ト
ス難見定要スルニ幕政ノ頃一定ノ法則ナキヨリ各村地先
ニ於テ漸ク附洲ノ生スル毎、其本村ヨリ開墾、着手シ甚

シキハ其向岸ニマテ侵蝕シ而シテ其侵蝕セシ部方ハ直チ
ニ該村ノ所領ト定メ奉リタルモノ、如ク結局所有ト所屬
トヲ混同セシモノトモ存於ニ付今日兩國ノ經界ヲ釐定ス
ルニ當リ後ニハ旧記ト成跡トノミニ據ル時ハ實地點數ノ
飛地ヲ現出シ恰モ犬牙錯雜ノ形勢ト相成實以テ謂フ一カ
ラサルノ不都合可成生ト存スる者ハ去年以前者而チ三十
五年旧堀外、以テ地籍編製心得書ヲ七条第三項ニ憑據シ
川ノ中心ヲ以テ國界トモ定川中熱俣ノ附海ハ都テ南岸堤
防ヨリ測量ニ取テ可然茲當今澱川流域土木起工ノ場合本
件確定不致テハ尔來進ク附洲現出ノ分所屬難モ定ノミナ
ラス從來ノ流作地ニ對シ地券下付方ニモ争交々留至急何
分ノ御指揮ホ仰度依之別紙圖面相添此般相伺也
明治十四年八月八日
大阪府知事建野三

内務卿松方正義代理
内務大輔土方久元殿

坂地 古七五四号

澱川沿流攝河國境定方之義ニ付本年六月三十日付ヲ以テ
當有卿ヨリ相伺置候次第モ候處右ハ今一應舊圖書等調査
ノ上可成旧境ヲ變セサル様致度旨參事院書記生吉田義高
ヨリ當有主務者一諭示之趣モ有之ニ付為念再調ヲ遂ケ且
大阪府一モ及推問候得共該地ハ從來不明瞭ナルヲ以テ更
ニ制定方相伺候モノニ付元ヨリ據ルヘキ程ノ旧圖書トテ
ハ一切無之何分旧時ノ景況ヲ知ニ由ナク候間左様御承知
可然御取計有之度御参考ノ為メ旧地圖五折相添此般申進
候也

明治十六年十二月十四日 内務書記官

内閣書記官 御中

追テ旧地圖ハ御調査直濟御返却相成度候也

大甲五二九号

明治十七年一月廿一日

大臣 三條

有栖川

内閣書記官

作田 中

大藏省伺地方稅賦課方之事參事院勘查進呈ス依テ回議
ニ供ス

參議

山縣	大木
出田	松方
大木	川村
	佐木

十三

大藏省

明治十七年一月十九日

第一局印

別紙大藏省伺地方稅賦課方ノ件ハ參事院上陳ノ通御施行
相成可然哉第二局合閣仰高裁候也

甲第三號

別紙大藏省伺地方稅賦課方ノ件審査スル處左ノ如シ

按スルニ地方稅中地租割ノ儀ハ大藏省伺ノ如ク九來地
租額ニ依テ賦課シタルモノナレハ其課率ニ等差ヲ立ツル
ヲ要セスト雖モ特リ戸數割ノ如キハ元其制限及一定ノ
依ルヘキナケレハ或ハ土地ノ貧富ニ依リ等差ヲ立ルハ
實際不得止儀ト認定ス

右ニ由リ指令案左ノ通ニテ可然哉上申候也

指令案

伺ノ趣地租割ノ儀ハ伺ノ通戸數割ハ一管内ニ於テ其課
率ヲ異ニスルモ妨ケナキ儀ト可相心得事

明治十七年一月廿八日

參事院議長代理

明治十七年一月十日

參議山縣有朋印

太政大臣三條實美殿

參照

地方稅規則

第一條 地方稅ハ左ノ目ニ從ヒ徵收ス

一 地租三分一以内

一 營業稅并雜種稅

一 戸數割

十四年第六号布告

府縣會ハ其議定スルキ事件中細目ニ係ル事項ヲ以テ區町村會若クハ水利土切會ノ議決ニ付スルヲ得ヘシ此旨布告候事

甲五二九

十六年十二月廿八日受

受乾第一四八三号

静岡縣申牒地方稅賦課方ノ義ニ付伺

地方稅中地租割戸數割賦課方ノ義ニ付別紙寫ノ通静岡縣
 令ヨリ伺出審按スルニ地租割ノ義ハ地力相當既定ノ地租
 額ニ依リ其土地ニ賦課シタルモノニ有之然ルヲ一管内ニ
 於テ之レカ課率ニ等差ヲ立ツルハ固ヨリ謂ハレ無キ義ニ
 有之又戸數割ノ義モ一定ノ課額ヲ以テ徵收ス一キモノニ
 可有之然レ氏十四年第六号布告ニ據リ該町村内納額ノ總
 計ヲ町村會ノ評決ヲ以テ各自ノ貧富ニ應シ其課額ニ差等
 ヲ立テ徵收スル如キハ不都合無之ト雖モ該縣申出ノ如ク
 一管内ヲ數部ニ分テ各部其課率ヲ異ニスルハ允當ノ處分
 ニ無之因テ縣會決議ト雖モ聞届ケサル方可然ト思惟候得
 共法律上明文無之ニ付此般一應相伺候也

二二四

大

敷

當

明治十六年十二月十七日

大藏卿松方正義

太政大臣三條實美殿

調第四拾七号

地方稅賦課方ニ付伺

地租割戸數割稅ヲ課スルニ一管内ヲ數部ニ分テ(東部西部
或ハ東部中部西部又ハ甲國乙國丙國等ノ類)府縣會決議ヲ
以テ各部其課率ヲ異ニ(譬ハ甲部ハ地租壹圓ニ付三拾錢ヲ
課シ乙部ハ貳拾五錢ヲ課スルノ類)スルモ不都合無之乎
右聊疑義相生シ決兼候條至急何分ノ御指示相成度此般相
伺候也

明治十六年八月廿五日

靜岡縣令大迫貞清

内務卿山田顯義殿

局甲三〇八號

明治十七年一月廿四日

大臣

三條 有柳川

内閣書記官

谷金作 森間 甲

賞勲局伺褒章賜與方之事參事院勘査進呈ス依テ回議
供ス

參議

山縣	大木
山田	
大山	松方
	川村
	佐々木

十四

明治十七年一月廿四日

第二局印

別紙賞勲局伺褒章賜與方ノ件ハ参事院意見ノ通御指令相成可然哉仰高裁候也

甲第六号

別紙賞勲局伺褒章賜與方ノ件審査スル處左ノ如シ

按スルニ谷地方官ニ於テ容年第十七号達第一條褒章ヲ
賜フヘキ者之トアル文意ノ解釈ヲ異ニシ隨テ行賞上
區々ニ涉リタル趣。有之右ハ畢竟其法文ノ判然セサル
ニ起因セシモノナリ抑容年第十七号達第一條ハ同第一
号布告ノ文意ヲ承ケタルモノニシテ褒章ヲ賜フヘキモ
ノトハ所謂褒章ヲ賜フヘキ筋ノモノト云フカ如キ意味
ナルナリ故ニ褒章條例第一條ニ掲ケタルモノハ勿論同
條ニ亞クヘキ實行アルモノヲモ右ニ包含シ行賞スル儀
ト認定ス

右ニ由リ指令案左ノ通ニテ可然哉上申候也

指令案

伺ノ通

明治十七年一月廿八日 参事院議長代理

明治十七年一月十七日 参議山縣有朋印

太政大臣三條實美殿

参照

○褒章條例

第一條 凡ソ自己ノ危難ヲ顧ミス人命ヲ救助セシ者又ハ
德行卓絶ナル者孝子順孫
婦義僕ノ類又ハ公衆ノ利益ヲ興シ成績
著明ナル者疏河築堤修路墾田ノ業或ハ貧
院學校設立ノ類ヲ云フヲ表彰スル為メ左ノ三
種ノ褒章ヲ定ム

紅綬褒章

右自己ノ危難ヲ顧ミス人命ヲ救助セシ者ニ賜フモノトス

綠綬褒章

右德行卓絶ナル者ニ賜フモノトス

藍綬褒章

右公衆ノ利益ヲ興シ成績著明ナル者ニ賜フモノトス

○十六年第百七十三號

明治十四年壯第百六十三號布告褒章條例ニ依リ褒章ヲ賜フ
ヘキ者又ハ公益ノ為トニ金穀財産等ヲ寄附シタル者ハ金
銀木杯若クハ金田ヲ賜ヒ又ハ褒章ト金銀木杯金田ヲ併セ
賜フコトアルヘシ

○十六年第百七十七號

金銀木杯賜與手續

第一條 褒章ヲ賜フヘキ者ニ金銀木杯又ハ金田ヲ賜ヒ又
ハ褒章ト之ヲ併セ賜フトキハ其等差左ノ如シ

定例

畧之

授賞勳局上申第百七十三號

明治十六年十二月廿一日

十六年十二月廿一日

賞勳局

賞勳局
総裁
柳原前光

本年第十七號達金銀木杯金圓賜與手續第一條ニ褒章ヲ賜
フヘキ者云々有之候ハ本年第一號布告ノ文意ヲ承ケタル
モノニ有之候處各地方官ニ於テ右文意ノ解釋ヲ異ニシ隨
テ行賞上區々相成候趣ニ相聞候抑褒章ヲ賜フヘキモノト
ハ所謂褒章ヲ賜フヘキ筋ノモノト云フカ如キ意味ニテ即
チ褒章條例第一條自己ノ危難ヲ顧ミス人命ヲ救助セシモ
ノ德行卓絶ナルモノノ公衆ノ利益ヲ興シ成績者明ナルモノ
ハ勿論第一條ニ亞クヘキ實行アルモノヲモ包含シタルモ
ノト存候條此段相同候也

二二八

内甲六八三号

明治十七年一月廿三日

大臣

三條有柳

内閣書記官

谷金作
森田中

内務省上申醫術卒業試験規則追加之事務院勸査進呈
又依テ回議ニ供ス

参議

山縣	大木
山田	
大木	松方
	佐木

大
政

大
政

官

明治十七年一月廿三日

第二局印

別紙内務省上申医術開業試験規則追加ノ件参事院意見ノ
通御布達相成可然哉仰高裁候也

甲第七号

別紙内務省上申醫術開業試験規則追加ノ件審査スル處左

ノ如シ

按スルニ容年卅第三十四号布達醫術開業試験規則第五
條但書ニ齒科医術試験ハ全科一時ニ受クルモノトスト
アリテ其年限ナシ故ニ第八條ニ但書ヲ追加シ年限ヲ定
ムルハ至當ノ義ニ付上申ノ通り御布達相成可然ト認定
ス

右ニ由リ布達案九ノ通ニテ可然哉上申候也

布達按

内務省成案ノ通

参事院議長代理

明治十七年一月十七日

参議山縣有朋印

太政大臣三條實美殿

内務省、通牒

明治十七年三月三十一日

醫術開業試験規則

第五條 醫術開業試験ハ之ヲ二期ニ分テ前期試験後期
試験トス前後二期ノ試験ヲ同時ニ受クルコトヲ得ス
但齒科醫術開業試験ハ全科一時ニ受クルモノトス

第七條 齒科試験科目ヲ定ムルコト左ノ如シ

- 第一 齒科解剖及生理
- 第二 齒科病理及治術
- 第三 齒科用藥品
- 第四 齒科用器械
- 第五 實地試験

第八條 前期試験ハ一ヶ年半以上後期試験ハ更ニ一ヶ
年半以上修学セシ者ニ非レハ之ヲ受クルコトヲ得ス

坤衛第一〇七八号

廿六年十二月廿六日受

醫術開業試験規則追加之義ニ付上申

本年十月第三十四号布達醫術開業試験規則中齒科醫術試
驗出願者修學年限無之候ニ付該規則第八條ニ左按ノ通但
書御追加相成候様致度御布達案相添此段及上申候也
明治十六年十二月二十一日

内務卿山縣有朋

太政大臣三條實美殿

本年財第三十四号布達醫術開業試験規則第八條ニ左ノ
但書ヲ追加ス

但齒科醫術開業試験ハニケ年以上修學セシ者ニ非サ
レハ之ヲ受クルコトヲ得ス

右布達候事

明治 年 月 日

太政大臣三條實美

内務卿山縣有朋

第貳號

明治十六年財第三拾四号布達醫術開業試験規則第八條

左ノ但書ヲ追加ス

但齒科醫術開業試験ハニケ年以上修學セシ者ニ非サレ
ハ之ヲ受クルコトヲ得ス

右布達候事

明治十七年一月三十一日

太政大臣三條實美

内務卿 山縣有朋